笠崖荘の殺人

洸淋寺 凪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

笠崖荘の殺人

【Ｎコード】

Ｎ０３４８Ｄ

【作者名】

洸淋寺　凪

【あらすじ】

ある日、主人公のヨウジはパーティーに行った。そこで待ち受けていたのは同年のカンジの死であった・・・・・カンジは何故死んだのか、いったい犯人は誰なのか・・・・・企凪櫛の初の推理（？）小説！！

人物紹介

ヤマダ　ヨウジ：主人公。まぁまぁ推理力を持った１３才の男。趣味はナンパ。

サガミ　ハル：ヨウジとは同年で、友達。特技は盗み。結構な自信家。

オウミ　ゲン：ヨウジとは同年で、ナンパが趣味。運動神経がいい。

コイシ　ジュント：ヨウジと同年。趣味は狩。

ヤガミ　ユウスケ：ヨウジと同年。萌え系フィギアを集めていて、いつも持ち歩いている。

ヤナジマ　カンジ：ヤナジマグループという会社の社長の息子。ヨウジとは同年で、今は笠崖荘という別荘に住んで居る。

コマゴメ　アツシ：カンジの執事を使える男。今年で八十歳を迎える。

日が落ちる数時間前、ヨウジはまだ静かな笠崖荘を窓からながめていた。

もうじき日が沈み、笠崖荘ではパーティーが行われる。

ヨウジはそのパーティーには参加するつもりだった・・・・・若い女性をナンパするために！

「ヨウジ？」
後ろからハルが呼ぶ。
「今日は何時からパーティーだっけ？」
そう、ハルもヨウジと同じく笠崖荘のパーティーに参加するのだ。
しかしハルの狙いは若い女性では無く、笠崖荘のオーナーの指にはめられている指輪であった。
笠崖荘のオーナーの名はカンジといい、ハルやヨウジとは同年であった。
しかし、年齢は一緒なのだが財産力が違う。
カンジの家は世界に名をとどろかせる有力財産家なのだ！
そしてそのカンジの指にはまっている指輪とは、世界最高級の指輪を作る事で有名な、「ｔｈｄ・ｒｉｎｇ」という会社製の、マリンの響きという指輪なのだ。それはリングにプラチナを使い、そこには十二カラットの五つのサファイアが埋め込まれるといった超高級物なのだ！
そんな代物を盗むには、おそらく超能力でも使わなければ不可能だろう。
しかし、ハルには絶対に盗み出す自信が有った。

とうとう日は沈み、笠崖荘でのパーティーが始まった。
ヨウジはハルを誘い、笠崖荘へ向う。
「よう！ヨウジじゃん！」
後ろから自分を呼ぶ声がした。これまた同年のゲンである。
ゲンのパーティーへ向かう理由はおそらく、ヨウジと同じくナンパだろう。
そしてしばらく歩き続けること約二時間、笠崖荘へ着いた。
「そこの綺麗なお姉さん！僕と一緒にお茶でもしない！」
ヨウジとゲンが、笠崖荘へ入って初めてしゃべった言葉がこれだった。ハルはといえば、笠崖荘へ入ってから、姿を消してしまった。

そして無事にパーティーは終わった・・・・
ヨウジやゲンは声をかけた人全員に断られ、ハルはカンジのマリンの響きを狙っていた。
「なんだか鼻がツンとするなぁ・・・・」ゲンが言った。
そして、スピーカーからカンジの声がパーティーの閉会を告げようとしていた。その時・・・・一斉に電気が消えた。

二、三分経つと、明かりが戻った。
閉会の合図を待ったが、スピーカーからは一行に合図は出ない。
「うわぁ！カ、カンジ！！」
人込みの真ん中辺りでこれもまた、同年のジュントの声が聞こえた。
どうやらカンジは倒れているらしい。
すると、そこへひょっこりハルが人込みの中から顔を出した。この人込みに紛れてマリンの響きを盗むつもりなのだ。
「あら！？マリンの響きが無い！」
ハルは笠崖荘全体に聞こえるくらいの馬鹿でかい声で叫んだ。

そしてヨウジ達、パーティー参加者は、洗いざらしに検査され、怪しい人物が三人に絞られた。
一人目はなぜかパーティーにチャッカマンとサバイバルナイフを持って来たジュント。
二人目はパーティーに唐草模様の手ぬぐいに、ライターと花火と軍手を持って来たハル。
そして三人目はリュックサックに萌え系のフィギアを詰め込んでいた、又々ヨウジと同年のユウスケであった。
「どうしてオレが容疑者にされなくちゃいけないんだよ！！」
ユウスケは萌え系のフィギアを投げた。
「このパーティーに何か持ち物を持って来たのが、あなた達だけだ

からです！」
　カンジの執事を勤めるアツシが、直に八十歳を迎える体を激しく奮わせながら言った。
「何かを持って来たぐらいで容疑をかけるなんて言語道断だよ！カンジ一人くらい道具無しでも出来るはずさ！」と、ハル。
「本当だよ！オレはただこのミカチャンと一緒にパーティーを楽しもうと思って連れて来ただけなんだからなぁ！！」
　ユウスケがミカチャンとかいうらしい萌え系のフィギアを指さした。
「確かに、ハルならカンジを殺して指輪を盗みかねないな・・・・現に最初、ハルがカンジの指輪が無い事に気付いたしね！」と、ジュント。
「まだカンジが死んだ訳じゃぁ無いんだろう！カンジは無傷な訳だし！」
　思わずヨウジは言ってしまった。
　既に笠崖荘にはヨウジ、ゲン、ハル、ジュント、ユウスケ、アツシ、カンジ（死体？）の七人しか居ない。その笠崖荘にヨウジの声がこだまする。
　アツシがさっと、カンジの脈を確認する。
「・・・・・・」
　アツシは俯き、首を振った。
「死んでる・・・・・かぁ・・・・・・」
　ヨウジは頭を抱えていた。
　カンジが死んだ・・・・・　一体誰がそんな事を？それに指輪はどうしたんだ？
「さぁ、誰が殺したんですか！」
　アツシが叫んだ。
「知るかよ！」
　容疑のかかっている三人が異口同音に言った。
　犯人はどうやって指輪を盗んだんだ？

いや、盗むのくらいはあの停電の時にすればいい。
ならば何処に指輪を隠したんだ？
「ヨウジ、どうした？」
回想モード中のヨウジをゲンが現実へ引き戻した。
「あ！ちょっと気になる事があってね！」
そしてまた回想モードに入る・・・・・・
そうだ、分かったかもしれない・・・・・いや、これがわかった所で犯人が決まったわけでは無いか・・・・だが、聞いて見る価値は有るな。
「あのぉ・・・・アツシさん！」
「なんでしょうか？」
アツシがゆっくりとした足取りでヨウジの方へ近付いて来る。
「笠崖荘には大事な物をしまう金庫室みたいな部屋は有りますか？」
「金庫ですか・・・・はい、有りますよ！」
よし！
「では、この荘に貴方以外の執事や冥土はいますか？」
「いません。しかしカンジ坊ちゃまのジムリーダーなら来ていましたよ！」
「ジムリーダー？はい、ヤナジマグループの経営するジムのリーダーです。・・・・・たまに坊ちゃまのダイエットメニューを追加しに、ここへ来るのですが・・・・・」
「今日は居ましたか？」
「いえ、今日はまだ・・・・」
「まだ？」
「はい、後三時間位で来るお時間です」
「カンジが死んだ事は伝えて無いんですか？」
「はい、そうすればきっと混乱を招くと思いまして・・・・」
「・・・・・・・・・」
分かった・・・・・
「アツシさん・・・・」

「はい？」
「金庫室を見せてもらえますか？？」
「駄目です！」
「なんでだよぅ～！！こう見えてもヨウジは名探偵なんだぜ！」
「ハル、それは迷探偵の事かな？？」
「ゲン・・・・ウザイ！！」
ハル、ゲン、ユウスケが言い争っている。
「アツシさん・・・・チェスタートンの折れた剣という話を知ってますか？」
「いえ・・・・」
「では聞きます・・・・木の葉を隠すのならどこに隠すのが一番いいでしょう！」
「・・・・・・・・・・」
「答えは森の中です」
「それが何と・・・？」
「木の葉を隠すなら森の中、では指輪を隠すならどこが一番都合が合うでしょうか？？」
「木の葉を隠すなら森の中・・・・・指輪なら・・・・指輪の中でしょうか・・・・」
「そう、指輪を隠すなら指輪の中です・・・・さぁ、金庫室を見せて下さい！金庫室になら指輪がごっそりあるでしょう？」
「確かに、金庫室になら指輪が沢山ありますが、あそこの部屋は小切手等も有るため一般の方はちょっと・・・・」
アツシは嫌そうな顔をしながら言った。
「分かりました・・・・ならばカンジのジムリーダーさんがいらっしゃってからならよろしいですね！」
「・・・・・・・えぇ、確かにあの方と一緒なら・・・・・」
「ありがとうございます！」

それからいくらか経ち、カンジのジムリーダーが来た。

「それでは、行きましょうか・・・・・」
アツシから事情を聞いたジムリーダーが、表情一つ変えずに言った。

「ここが金庫室です・・・・」
そい言うとアツシはガチャガチャとロックを解除し始めた・・・・・・
「ふぅー・・・・ロックが外れましたので、私が一先ず人が通れる位の道をつくってきます・・・・なにせ金庫室の中は金貨などで足の踏み場も有りませんからね・・・・・」
そしてアツシが部屋に入ろうとした時、ヨウジは言った・・・・・・
「隠した指輪は取らないで下さいよぉ～！アツシさん！！」
「！？」
一瞬だけアツシの動きが止まった。
「はははは！ヨウジ君、それは本当に指輪が有るなら、ですけどね！」
アツシは笑顔で振り返りながら言った。
「はい！」

しばらくしてアツシが戻って来た。
「ありがとうございました。片付ける時に何か指輪らしき物は有りましたか？」
「いえ、特に・・・・」
「では部屋に入りましょうか・・・・」
「は、はい」
「一番前にはアツシさん、次に僕、そしたらハルで、最後にジムリーダーさんジムリーダーさん、ハルは盗み癖が有るので注意して下さい！」
「どうしてハル君もなんだい？ましてや盗み癖まであるなんて！」

「ウルサイ！！オレはヨウジに認められてんだよ！」
　ハルが怒鳴る。
「ジュント、ユウスケ！もう帰っていいぞ」
　ヨウジは手で「しっしっ」と払う。
「オレは？」
　ゲンが嘆く。
「ゲンはしっかり金庫室の前で見張っていてくれ」
「なんかよく分からないけど・・・・いっかぁ～！」
「それでは行きます」

　金庫室は少し埃っぽく、金貨や宝石が沢山散らばっていた。
「うわ～！お宝～！！」
　ハルは目を金マークにしている。
「ハル、指輪を捜してくれ！お前が狙ってた指輪だ・・・・・それが犯人を断定する手掛かりになるんだ！」
「りょうか・・・・・って！なんで盗もうとしてた事しってんの！！」
「いや・・・まぁね！」
　ハルはキョロキョロ周りを見渡し、終いには犬のように地べたにはいつくばった。
「むむ！老人執事の方からお宝の匂いが・・・・・」
「よくやったハル。ジムリーダーさん、アツシさんの体を点検してください！」
「分かった！」
　そういうと、ジムリーダーはアツシの方へ近づいた。
「ち、近寄るな！」
　アツシがわめく。
「う・・・・うわぁ・・・・・あ～～～～～～～～！」
　叫びながら、アツシは出入口の方へ突っ込んで行く。
「あ！逃げられる！マリンの響きがぁ～！！」

ハルが嘆く・・・・
バン！！大きな音をたて、ドアが開いた。
「ゲン！」
ヨウジは目一杯の声で叫んだ。
ゲンの横をアツシが駆け抜ける。
「う、うぉぅ・・・・」
ゲンは目を丸くしていたが、ようやく場の空気を読めたらしく、アツシの三倍位のスピードでアツシを追い掛け始めた。
ヨウジ達が外に出ると、ゲンに羽交い締めにされたアツシがいた。
「ヨウジ！これでいいか？」
「ああ、ありがとう」
ヨウジは軽く微笑むと、アツシの方へと歩み寄った。
「どうしてカンジを殺してまで指輪が欲しかったんですか？」
ヨウジがそう言うと、アツシはがっくりうなだれこう言った。
「指輪が・・・・目当てじゃないんです・・・・」
アツシが言う事には、カンジを殺す事が目的だったそうだ。
アツシは、カンジの祖父に実の母を殺され、養子として引き取られたんだそうだ。
アツシの父はというと、その頃はもう肺ガンで死んでいたそうだ。
アツシは、母の仇を取るために、孫のカンジを殺したそうだ。
それとついでにマリンの響きを盗み、それを裏ルートに流し、売れた金で身を潜めようと考えたんだそうだ。
「それはそうとどうやって殺したんだ？」
ハルが顔を斜めに傾ける。
「そうだよ！この人だってちゃんと調べられたんだ！でも鈍器一つ無かったじゃないか！」

ゲンがアツシを哀れそうに見る。
アツシはもうゲンからははなれ、ジムリーダーさんにとり抑えられている。
「そんなの簡単さ！」
「ヨウジ！勿体振らずに言っちゃえよ！！」
ハルがブーブー言って来る。
「アツシさんはカンジをあの停電の時に殺して無いんだ。」
「え！？」
みんなが異口同音に言う。
「アツシさんはカンジをあそこにあの停電の時に連れて行っただけなのさ！」
「じゃ、じゃあカンジはそれより前に殺されていたって事？」
「そういう事になるな！ゲン、閉会の合図の時、なんか鼻がツンとするって行ってたよな！あれはクロロホルムだ」
「クロロホルム？」
「そう、クロロホルムとは睡眠薬なんだ。よくサスペンスドラマなんかで誘拐のシーンにハンカチを口に当てさせるだろ！あれはハンカチに染み込ませたクロロホルムを吸わせて、眠らせているんだ！」
「ほぉ～！」
「しかし現実はドラマとは違うんだ！実はこのクロロホルム、吸うとしばらくの間、アドレナリンが活発に出て興奮するんだ。」
「そしてカンジ乱闘になった。その時にきっとマリンの響きのサファイアがしとつ壊れてるはずだよ！」
そう言うと、ジムリーダーさんがアツシのポケッから、マリンの響きを取り出してくれた。
確かにサファイアが一つ、欠けている。
「続きをお願い！」
ハルの目付きは真剣だ。
「クロロホルムを吸った直後は興奮して暴れますが、そんのは直に収まります。そして、カンジは眠ってしまいました。そして、何等

かの方法で殺した！」
「ちょ、ちょって待てよ！パーティー中はカンジも会場にいたんだぜ！殺すなら溺死か、絞殺だろ？それってそんなにすぐに死ぬものなのか？」
ゲンが言う。
「とりあえずは呼吸を止めちえゃばいいんだ。君らはとりあえず生きてるか死んでるかは、呼吸の有無で判断してるからねぇ！呼吸を止めるなら、溺死だろう！肺の中に水を溜めちゃえばもう呼吸は出来ないからねぇ！」

そして、アツシは刑務所へ連行された。
ヨウジは黙って見つめる。そして不意にジムリーダーの手からマリンの響きをつかみ取り投げ捨てた。
そして三年後アツシは刑務所で息を引き取った。マリンの響きの行方が分からぬまま・・・・

＜ＥＮＤ＞

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0348d/

笠崖荘の殺人

2010年10月11日22時13分発行